

【特集】 聖堂献堂六〇周年記念特集②

聖心女子大学の聖堂建築

—— 創建の経緯と概要 ——

安發 和彰

人びとから親しみと尊敬を込めて「おみどう」と呼ばれる聖心女子大学のキリスト教聖堂は、二〇一九年一月に献堂から六〇年を迎えた。敗戦（一九四五年）間もない一九四八年四月、新学制によって開学した本学では、被災した旧久邇宮家邸の広大な跡地（戦後に映画会社「大映」が所有。一九四七～五四年に本学が順次購入。全二四〇〇〇坪）に新キャンパス建設の計画が立てられ、工期はその後一〇年間、五期に亘った（一九四九～五九年）大
学初期建造群（図1）。聖堂は、当初から大学の中心をなすべく企図され、全体プラン（平面）のまさに中央に位置する大規模建築（延べ面積一七八二平方メートル）として、最終第五期、一九五八～五九年に、学舎二号館および聖心会渋谷修道院の「コンベンツ」とともに、着工され竣工した。五九年一月二四日には東京教区長土井辰雄

大司教の司式のもとで献堂式が執り行われ、聖心会の創立者、聖マグダレナ・ソフィア (Madeleine Sophie Barat 一七七九〜一八六五年、一九二五年列聖) の御名を頂いた。そのときから、第二ヴァティカン公会議 (一九六三〜六五年) 後の典礼改革を経て祭壇周辺の一部を一九六五年以後に改変、おおむね当初の姿を変えることなく、肅々としてキリスト教の儀式が執行され、修道院のメンバー、本学の学生たちをはじめ、広く人びとの日々の祈りを受け続けながら、今日に至っている。

以下の報告は、本学のキリスト教文化研究所による「献堂六〇周年記念」の包括的な聖堂調査研究の一端である。当聖堂のキリスト教聖堂としての建築的特徴に関する調査結果の一部であり、残された一七枚の聖堂設計図 (一九五七年十一月三日付、日建設計工務社作成) (図2・3・4) に基づきながら、(一)設計の意図、(二)「前庭」および正面 (ファサード)、(三)身廊 (祈りの空間)、(四)内陣 (儀式の空間) と各部分を順に追って検討してゆく。学舎 (一、二号館) や講堂館 (マリアンホール) 等と同様の鉄筋コンクリートを躯体とする近代的大規模ビルディング工法で建てられたなかに、いかに本学の建学の精神を顕彰しつつ、西洋の一般的な石造り聖堂建築の伝統が取り入れられているのか、また同時にどのような独自の工夫が試みられているのかという視点から、この聖なる建築の概要を提示することを目的とする。

(一) 設計の意図

聖堂を含む本学初期建造物群の全体設計は、一九四九年春、初代学長「マザー」ブリット、「マザー」シッケ

ルによる面談、「聖心女子大学建築後援会」にも寄与したGHQ（占領中の連合国軍総司令部）との交渉を経て、建築家竹腰健造（一八八八〜一九八一年）に委嘱された。竹腰は、東京帝国大学工科を卒業後、英国に渡り、建築士資格（ARRA）を得て、帰国後は住友財閥系のトップ建築家のひとりとして、すでに、住友ビルディング（現三井住友銀行大阪支店、一九二六年）、大阪証券取引所（現本館玄関部、一九三五年）、日本生命保険本店新本館（一九三九年）など、近代的オフィス・ビルディングの施工および設計を手掛けていた。いずれも、丸ノ内ビルディング（一九三三／一九二四年―一九九九年解体）や東京中央郵便局（旧局舎、一九三二年）等と並んで、当時最新の鉄筋コンクリート工法による欧米的な大規模建築であり、古代ローマ以来のバシリカ（矩形長堂）形式によりながら、機能的で合理的な建築造形の理念が明らかかなモダニズム風を取り入れ、その壮大な外観は、無装飾で簡素、壁面に深く切られた数多くの開口部、直線的な矩形の窓が整然と並び、それが明快で安定したリズムを刻み、荘重かつ「モダン」な雰囲気を生み出していた。

新キャンパスの複合建築の設営は、竹腰にとつて敗戦後の初仕事で（一九五〇年、双星社竹腰事務所創設。同年に日建設計工務社設立）（施工は清水建設）、戦後の荒廃した混乱のなかにあつて、聖心の「マザー」たちの「敬虔」で「優れた」精神に触れて、「心機一転」の「意欲に燃えて」設計、工務に専心したと記している。

残された当初の完成予想鳥瞰図（一九四九年五月付）（図5）によれば、聖堂は、被災した旧久邇宮邸本館を平屋洋館に改築した「クニハウス」（大学受付、大会議室等を設置。一九四九年―と一九一九年、「車寄せ」部分のみ現存）、二階に大講堂を擁するフロント・ホール館（現「マリアンホール」、一九五四年）、広い中庭の広がる二棟の学舎（三階建の一号館、一九五〇／五二年と四階建二号館、一九五九年）、修道院施設（二階建「セントジェラルド」は

一階が食堂、二階は修道院施設、一九五一年―一九九〇年改築で囲まれ、一号館北面に祭壇側を接して設置する構成だった。それは、聖堂が、新キャンパスのなかで全体の中心に位置しつつ、いっそうの静謐を保つことを目指した構想だったのである。

聖堂も含めてこれら初期建築群の各施設は、基本的には戦前の大規模オフィス・ビルディングと同様の造形理念と工法によって、全体的な統一感と調和を尊重しながら建造されていった。どの建物も鉄筋コンクリート造りの矩形プランで、立面でも直線の構成が貫かれ、壁面は簡素で無装飾、縦長の窓や扉口が乱れることなく連なっていた。それでも戦前の竹腰設計のオフィス・ビルディングと比較すると、開口部は二連一組の縦長窓とされてより縦長で大きく、随所に地上から二階、三階まで延びる柱壁が用いられていた（一号館や二号館の西扉口面Ⅱ図6、図1参照）。それらがあいまって、より明快に垂直感が強調され、より繊細で洗練された様相を呈して、重々しい厳格さが注意深く排除されているのが、新しい時代の学舎に相応しく、新鮮なのだった。また四基の大角柱から成る、新古典主義風のマリアンホールの正面エントランス（図7）にしても、その垂直的な上昇感が、権威的威圧感を凌いで、堅固でありながら、伸びやかな美観を生み出しているのが設計上のポイントであったにちがいない。

（二）「前庭」および正面（ファサード）

「聖堂」は最終第五期の建造だった（一九五八年十二月に完成）。とはいえ、そもそも聖心会のキリスト教精神

を基盤とする教育理念を掲げ、また修道院施設を擁する新キャンパスには、建設当初から、儀式を執行し、日々の祈りを捧げる礼拝空間が不可欠だった。そこで工期の初めに、敷地内の戦災を免れた久邇宮邸の「御常御殿」を移築し（もと一九二〇〜二四年に建造の近代的和風入母屋造り、現「パレス」Ⅱ二〇一七年に国の重要文化財指定）、その「謁見室」に仕切りを立てて高祭壇を配置して礼拝室とした。後の学舎一号館建設に際して、その東棟一階の一室に質素ながらも天井に太い木材の梁を架けた、重厚な雰囲気漂う仮聖堂を設け（一九五〇年四月祝別、現メデアセンター）（図8）、本格的な聖堂の創建を待った。

後日竣工した「聖堂」は、一号館やリアンホール、二号館と同様に、躯体の壁面や床面を灰白色のテラゾー（人造大理石材）を用いて石造風外観とし、西洋の大規模なキリスト教聖堂の長堂バシリカ式伝統を尊重した構想による独立建築であった。

正面扉口を北側に開く聖堂入口の前面は、四方を「セントジェラルド」（東側）、学舎二号館（当初はインターナショナル・スクール校舎）（北側）および「クニハウス」（西側）、それにそれらを二階で繋ぐ独特な坑道状の「渡り廊下」（その一階部分は通り抜けできる角柱列構造）で囲まれる「中庭」を成していた。この中庭は、西洋中世初期以来のバシリカ式大規模聖堂における、入堂前に身を浄める場所、すなわち四方に列柱廊を巡らした「前庭」（アトリウム）に相当する「入堂の準備」のための空間でもあった。一九九八年、西側に五階建ての三号館（設計は丹下健三）が創建され、より閉ざされた「前庭」形式に近づいた。

そこから望む正面扉口全体（ファサード）（図9）は、幅二三、高さ約一五メートルに達する直線的な構成で、中央最上部に十字架を掲げる鐘塔を頂いている。内部構造に従って五分されたうちの中央部（幅は聖堂身廊【後

述」と同じ)では、石造聖堂建築の「控え壁」(バットレス)を模した柱三基が、地上から最上部の植物文様を施した石造の「裝飾パネル」まで途切れることなく一気に達している。これによって強調された垂直の直線的構造は、縦長の大窓(「十字架」)を暗示する内枠で仕切る)と合わせて、全体に均斉のとれた清楚な印象を与えながら、明快で軽やかな上昇感の表出が企図されていた。地上にあって、神に捧げ、常に上方の彼方、聖なる天上世界を希求するというキリスト教聖堂本来の理念が現れた一面である。

(三) 身廊(祈りの空間)

ファサードの中央大扉から入って進むと、この聖堂に独特な「エントランス・ホール」(図10)である。床に大理石を敷き詰めたこの空間は、一般的には玄関廊(ナルテクス)と呼ばれる悔悛者や未洗礼者のための場所なのだが、ここでは、セントジェラルド(東側)、マリアンホールおよびクニハウス(西側)とそれぞれの二階が「渡り廊下」によって繋がれ、東側廊下を通して聖心会修道院のメンバーがホールから入堂し、西側からは学生その他の人びと(会衆)がこのホールに参入する、すなわちさまざまな人びとが交じり合い、肩を並べて聖堂内に歩を進める空間なのである。『献堂式報告書』(一九五九年一月二四日付、加藤和哉訳)によれば、一九五九年の献堂式のなかで、当聖堂を聖マグダレナ・ソフィアに捧げる感動的な祈りと儀式が執行されたのはこのホールにおいてだった。

内部に設けられた「玄関廊」から参入するこの聖堂(図11)では、正面最奥(南側)の段石上の高みに、儀式

と祈りの中心である祭壇が設置され、それが聖堂建築の全体構想の核心を成している。祭壇に正対して向き合う「身廊」は、人びとが各種典礼の儀式に参加し、礼拝の祈りを捧げる敬虔空間で（七〇〇人超収容。幅一六、入口扉からの奥行二五、天井までの高さ一二メートル）、やや幅広なのは、東西横脇に修道女たちのための一連の椅子席を設けたためである。この構成は、多くの聖心会学校附属聖堂に共通する構想に倣ったといわれる。

その身廊では、東西それぞれに太い六基の角柱の列柱（各柱頭部に西洋の古代から中世に受け継がれた植物文様が浅く彫り込まれている）が、高く、重い天井を支えながら、力強いリズムを刻んで広い空間に安定感をもたらすと同時に、身廊から溢れた人びとのための「側廊」空間を区切っている（図2・3参照）。

身廊の天井は西洋の石造り聖堂の「交叉リブヴォールト」を模倣する手法で架けられた（図12）。六基の角柱で五分されたそれぞれに、小天井（ヴォールト）を架けて連結するのである。各々が穏やかな四曲面から成る直方体の形体で、それら曲面を対角線（鉄骨による梁リブ）で補強し、梁の交点（石造り天井における石組みの中心である「要石」）部には、円形の人工照明が組み込まれている。和風の「平天井」工法を避けて、曲面小天井を連結する構成を採用し、円形ライトを用いて天井自体に照明光を広げる工夫をこらした結果、分厚いコンクリート製天井の重さもたらす重苦しい圧迫感を大幅に軽減できた。

天井を支える壁面（東西各六面。側廊天井から上部）には、東西とも六面それぞれに大きなガラス窓の開口部が切られている（北側壁は階上廊に面する二連縦長窓のみ）（図13・13-2）。西洋に伝統的な「高窓」風（クリアストリー状）の構成で、いずれも丸窓と三角窓、上部が半円形の縦長窓二つを組み合わせ（全体で高さ約五メートル）、朝（東面）、夕（西面）を通して陽光を採り入れ、身廊のみならず聖堂内部全体を照らし出している。丸窓の内枠

が「十字架」を象る以外には装飾や色彩が排除され、厚い窓ガラスを通過する透明な光は、聖堂内に禁欲的で静謐、清潔な雰囲気を生み出すのである。

身廊両脇の側廊は（東西とも幅三、高さ二・六メートル。平天井を架け、外壁に五つの「二連窓」を開く）（図14）、身廊の補助的空間である一方、東西七基の角柱各面に合計一四の「十字架の道行き」場面を表した一連の図が掲げられ、キリストの受難と復活に関わる特別な信心業「十四留の黙想」の場ともされる。

北正面入口からエントランス・ホール、玄関廊にかけては、祭壇までを見通すことができる階段状の二階が設置され（幅一六、奥行一〇メートル）、正面入口の五つの大窓から外光を採り入れている（図15）。当初から儀式と祈りのための聖歌隊席とされた空間である。伝統的には「階上廊」（トリビューン）と呼ばれ、現状でも聖堂によつては聖歌隊席に加えてパイプオルガン等が置かれるのがしばしばだが、もともとは女性信徒、皇族や王族を始めとする貴顕のための特別席なのだった。ここには、身廊部と同じ形式で「交叉リブヴォールト」状小天井が架けられ、身廊部空間との連続性が明らかにされている。

（四）内陣（儀式の空間）

聖堂南奥が、典礼執行の中心である祭壇を設置した司式の場合、「内陣」である（図16）。この内陣全体は、半円形プラン（半径約八・七メートルの広さ）で、身廊の天井と同様の高さ（地上約二二メートル）から丸味を帯びた半円形天井 \parallel 半ドームが架けられ、古代モニュメント風に（ローマのパンテオン等）天頂部に丸窓「オクルス」

を開き（直径二メートル程、屋上に天蓋を掲げる）、内部電灯も加えて、内陣に照明の光を導いている（図17）。段石とアーケード状の「障柵」（一九六五年頃までは聖体拝領台として使われた）によって身廊から仕切られたうえに、祭壇の台座も含めて床面に貴重な大理石を用いているのは、聖堂のなかでもここが格別の一面であることを示すためである。また別に、祭壇前に西洋の初期聖堂建築以来の「勝利門型アーチ」の形式を横して、身廊に向けて半円形大アーチ壁を建て付けたのは、祭壇周りの至聖所（アプシス）を、より奥まった神秘的な空間として印象付ける工夫だった（図16、図2・3・11参照）。

この大アーチの壁面には、台座上の大型石造彫刻「祈る聖母」（俯いて胸の前で合掌する。足下に黙示録の「月」と創世記の「蛇」を踏む）（東側）と「幼児イエスを抱くヨセフ」（長髪、顎鬚の壮年像。右手にマリアの求婚者として神殿に納めた「花が咲き開く棒」を持つ）（西側）が配置され、もとはアプシス後方の高所に掲げられたより大型の「みこころのイエス」像へと聖堂に集う人びとの視線を導いていた（これら三体の大彫刻は、長崎の彫刻家上田十米蔵【一九二〇〜九二年】の作である。この群像については調査報告別稿参照）。

祭壇の後方には、アプシスの最奥にアーチ型の飾壁（レタブルム）が設けられ、それを飾るモザイクの輝きが内陣のみならず、装飾性を排した聖堂全体のなかで際立っている（図18）。創建当初は全面を黄金のガラス・モザイク地で覆い、台座のうえに、正面向きで両腕を挙げて祈りのポーズ（オランス）をとり、その愛の象徴である胸の「みこころ」（心臓）を示す「みこころのイエス」像を掲げていたのである（図16参照）。このイエス彫像は、パリのサクレ・クール聖堂（Basilique du Sacré-Coeur de Montmartre, 一八七〇〜一九一四年）の祭壇上方の天井モザイク画と同様の図像である。典礼改革期の一九六五年頃には、この聖像は壁面から取り外されて（後の二

○一年の東日本大震災に際して聖像を損失した、近隣のカトリック麻布教会に寄贈、移管された)、七宝焼きのタイル・モザイクによる、死を克服して復活したキリストを象る「勝利の十字架」に変更された。その大型十字架のバックには、「聖心会の」創立者が深く愛された「【キリストと共にある】聖母の苦しみ」の「七滴の涙」のシンボル(山崎渾子)が色彩鮮やかに表現された。

元来祭壇は、救い主イエス・キリストの十字架上での犠牲の死を記念して執行される聖餐式のテーブルであり、典礼なかでの人びとの祈りと聖霊の交流の場とも考えられて来た。この聖堂においては、当初のキリスト彫像にしても、変更後の十字架モザイクにしても、祭壇のもっとも間近に掲げられて、祭壇が「キリストと人びとの出会いの場」であるのを率直に示している。それ故祭壇は、視覚的にも聖堂の中心として、聖堂内のどこからでも目視できるように構想されていたのであり、そのことは聖堂設計上極めて重要なポイントだった。祭壇の前面中央の浮彫「清らかな百合の花輪」に囲まれた「聖体のシンボル」「十字架を頂き、茨に囲まれたキリストのみこころ」「剣の刺さった聖母のみこころ」(図19)は、もとより聖心会女子学院の記章の図像にほかならず、その教育理念が聖堂での儀式と祈りのなかに表明されることを示すのである。

祭壇脇には、東西それぞれに内陣の半円形プランに沿う二基(全四基)の角柱で区切られた外側に、二階建てで、司式で用いる聖具および祭服等を収める「聖具・司式準備室」(サククリステイア)と「告解室」(コンフェシオ)。(東側)、「礼拝所」(カペラ) (西側) が配置されている(いずれも外壁面に五つの縦長窓が開かれる) (図2参照)。この礼拝所は、側廊に副アプシスを設けた三アプシス構成の伝統に基づくもので、ここでは、南西側の小扉口から入堂し、聖堂で儀式が執行される間にも、それを妨げることなく、常時、人びとが祭壇に向かい、私的な祈り

を捧げることが許されている場所なのである。

戦後すぐの一九四八年に構想、翌四九年に着工され、一〇年後の一九五九年に完成した「新キャンパス」の「初期建築群」は、学舎（二号館、三号館）、講堂館（マリアンホール）、そして聖心会修道院と聖堂から成る複合建築であり、全体的な統一感と調和が保たれていた。各施設とも、戦前からの大規模オフィス・ビルディングの機能的で「モダン」な造形性を洗練させ、近代的な鉄筋コンクリート工法を駆使して、随所で過剰な重厚感や裝飾性を排除し、明快で率直、清楚な空間の創出が目指されていた。なかでも、聖堂建築は、西洋の伝統的構想を尊重しながら、さまざまな工夫を凝らして、修道院の霊的観想生活にも相応しく、同時に広く学生に開かれた新たな時代の「新キャンパス」のシンボリックな存在として設営されたのだった。

初期建築群の構成では、（学舎一号館とセントジェラルドを結ぶ）坑道状「渡り廊下」と聖堂の間に開かれた東の「中庭」は、修道院施設に近い奥まった静謐空間で、聖堂を建築群の中心に囲み込む機能だけでなく、修道会メンバーの霊的な「瞑想」の場としても使用される構想であったと思われる。西洋の修道院建築では、中世以来、儀式と祈りの場である「聖堂」に接して、四方を屋根付きギャラリーで囲った中庭「回廊」（クラウストルム）を設け、日々の一定時間、そのギャラリーで瞑想を深めることが義務とされていたからである。

この中庭からは、聖堂の東側外観が樹々の木立の間から見渡せる（図20、図4参照）。エントランス・ホールの縦長窓から身廊壁の組み合わせ高窓、その下の側廊壁に開かれた二連窓、内陣周りの二階建て外壁の縦長窓が、水平に二層を成して整然と並ぶ立面は、正面入口上の鐘塔、祭壇上部丸窓の天蓋をアクセントとして、合理的で

均斉のとれた構成でありつつ単調に陥らず、創建六〇年を経た今日も変わることなく、透明な窓ガラスを通して陽光を堂内に導きながら、静かに息づいている。

資料・参考文献等

【一】 本報告で基本的資料としたのは、日建設計工務社の聖堂設計図面一七枚である。いずれも「聖心女子大學新築第五期工事／CHAPPEL／縮尺1／100／（昭和）32年11月3日／設計番号629／日建設計工務株式會社」の付記がある。図面上の単位は「尺」である。今回の調査に当たって、日建設計（現在名）から本学のキリスト教文化研究所に提供された。図版掲載に当たっては（図1、2、3）、報告者（安發）が図面コピーに補筆した。

【二】 本聖堂を含む大学キャンパスの設営については、主として以下を参考した。

- ① 三好切子『聖マグダレナ・ソフィアの生涯』毎日新聞社、一九七八年（最終章「フランスから日本へ」二三四～二四四頁）
- ② 竹腰健造『幽泉自叙』創元社、一九八〇年（「聖心との出会い」二五一～二五五頁）
竹腰は、「新キャンパス」建設と並行して、神戸海星女子学院（一九五二年）、戦禍焼失後の東京聖心女子学院本館（一九五六年）、小林聖心女子学院の聖堂（一九六五年）の各建築にも携わった。
- ③ 近代日本における大規模ビルディング建設の歴史的経緯については、以下を参照。

- ・竹腰②（「住友ビル建設に着手」一一〇〜一一三頁、「住友の建築課」一三五〜一三九頁）。
 - ・鈴木博之／和田亨編・解説『図面でみる 都市建築の昭和』柏書房、一九九八年（総論1「和魂洋才という背景」七〜八頁、5「戦後への展望」一一〜一二頁）。
 - ・大橋竜太他編・著『建築史 日本・西洋』「建築史」編集委員会、二〇〇九年（第二部「日本近代建築史」四二〜六二頁）他。
 - ④ 『聖心女子大学一九一六〜一九四八〜一九九八』聖心女子大学、一九九八年（大学創立五〇周年記念出版）（第二章1「戦後の大学制度改革と女子大学連盟」一五〜一七頁、同2「大学校地の選定」一七〜一八頁、第三章3「開学直後の校舎」二五〜二六頁、同7「大学建築計画の実現と経済協力」三〇〜三四頁、第五章9「35周年記念の施設整備事業」七三〜七五頁、第七章10「創立50周年記念事業の展開」一〇八〜一〇九頁）
 - ⑤ 『宗教と文化』聖心女子大学キリスト教文化研究所、第三五号、二〇一九年
 - ・山崎渾子「聖心会渋谷修道院聖堂について」四〜五頁。
 - ・加藤和哉訳「献堂式報告書」一一〜一八頁。
 - ・乾睦子「聖心女子大学聖堂の大理石について」二九〜三八頁。
- 【三】 西洋のキリスト教聖堂建築に関する主要参考文献は以下である。
- ① Y.Christe etc. *La grammaire des forms et des styles. Le monde chrétien*, Fribourg, 1982.（大高保二郎／岡崎文夫／安發和彰訳『中世 美の様式』（上下二巻）連合出版、一九九一年（「初期キリスト教建築」上巻三一〜

四〇頁。「建築」下巻二二〜二四頁、「中世ゴシック時代」下巻一五二〜一六二頁)

② 高野禎子「闇に射す内なる光」『季刊 ichiko』第一六号、一九九一年、四〜一六頁。

③ 馬杉宗夫『大聖堂のコスモロジー』講談社現代新書、一九九二年(第一章「教会の起源とその誕生」二〜四六頁、第二章「修道院建築」四七〜八八頁)。

④ 前川道郎『ゴシックということ』学芸出版、一九九二年(第一部第一章2「神に至る通路 キリスト教のバシリカ」二四〜二八頁、4「建築的機能主義」三三〜三五頁)。

⑤ 辻本敬子／ダーリング常田『図説 ロマネスクの教会堂』(ふくろうの本)河出書房新社、二〇〇三年(第一章「ロマネスク建築」二二〜四五頁)。

⑥ 加藤磨珠枝／益田朋幸『西洋美術の歴史 中世Ⅰ』中央公論新社、二〇一六年(第一章3「聖堂建築の始まり」六五〜八四頁)。

⑦ 木俣元一／小池寿子『西洋美術の歴史 中世Ⅱ』中央公論新社、二〇一七年(第三章1「典礼 天上と地上をつなぐもの」一九二〜二〇三頁、第三章2「典礼と聖堂」二〇三〜二一七頁)。

【四】 本聖堂の両側廊に配された一連の「十字架の道行き」図全一四点の各主題は以下である。①「手を洗うピラト(死刑の宣告)」、②「十字架を負う」、③「最初のつまずき」、④「聖母に会う」、⑤「キレネのシモンの助力」、⑥「ヴェロニカ聖顔を拭う」、⑦「再度のつまずき」(以上東側)、⑧「エルサレムの女たちを慰める」、⑨「三度目のつまずき」、⑩「聖衣剥奪」、⑪「十字架への釘付け」、⑫「十字架上の死」、⑬「十

字架降下（聖母に渡される）」、⑭「墓への埋葬」（以上西側）。人びとは、（四旬節の聖金曜日に）それぞれの図ひとつひとつの前で祈りを捧げ、黙想を繰り返した（「十字架の道行き」の信心業、十四留の黙想）。

① 柳宗玄／中森義宗編『キリスト教美術図典』吉川弘文館、一九九〇年（「十字架への道」の記述、一二九～一三〇頁他）。

② 和田誠／藤川長喜編・訳『十字架の道行の祈り』ドン・ボスコ社、一九九二年、他を参照。

【五】 本聖堂内陣「祭壇飾り壁」の「十字架」モザイクは、聖餐式（ミサ）と深く関わっている。聖餐式の秘蹟においては、祭壇上で司祭によって「パン」と「葡萄酒」が、キリストの「聖体」へと聖変化（パンはキリストの身体、葡萄酒はキリストの血）される。十字架は、キリストの（天地的）神性と（地上的）人性」を表明するしるしに他ならない。「十字架」を祭壇近くに表現した遺例としては、ラヴェンナのサンタポリナーレ・イン・クラッセ聖堂アプシスのモザイク（五四九年頃）他がある。

① 浅野和生「変容 十字架が象徴するキリストの神性」『名画への旅2 光は東方より』講談社、一九九四年、九六～一〇六頁他。

② 木俣／小池⑦（第三章1「典礼 天上と地上をつなぐもの」一九二～二〇三頁）。

図版出典

図1 『聖心女子大学1916～1948～1998』三三頁（安發補筆）

- 図 2 聖堂設計図 (図面第1号: 全体プラン) (安發補筆)
- 図 3 聖堂設計図 (図面第6号: 立断面図) (安發補筆)
- 図 4 聖堂設計図 (図面第5号: 東外観立面図) (安發補筆)
- 図 5 『聖心女子大学1916～1948～1998』三〇頁
- 図 6 『聖心女子大学1916～1948～1998』三二頁
- 図 8 『聖心女子大学1916～1948～1998』三二頁
- 図 16 『宗教と文化』第35号、七頁
- 図 7、9～15、17～20 安發撮影 (二〇一九年)